2025年12月11日
尾添　雅弘(人材育成部会)

TANOななっちゃ活動報告

[はじめに]

　宮崎市田野町の自然と文化に根ざした「TANOななっちゃ」。「TANOななっちゃ」は、地域の未来を育む拠点を目指しています。０歳から年齢制限はなく、誰でも自由に参加できるのが特徴です。ふらっと立ち寄れば遊び場があり、ねらって来れば深い学びがある。子どもも大人も共に育ち合う実験の場です。今回は「おTANOしみマルシェ」の中でTANOななっちゃを実施させていただきました。TANOななっちゃのブースには、300名を超える子どもたちや保護者が訪れ、自由遊びや森のアトリエ、焚き火、青空図書館を思い思いに楽しんでくれました。

　色の実験に没頭する“小さな絵師たち”、久しぶりに再会した“けん玉職人”の成長、そして焚き火を自然に支えてくれた「通りすがりのお父さんとお兄ちゃん」。
あたたかく、やさしい関わり合いが広がる時間でした

[実施内容]

おTANOしみマルシェ内でTANOななっちゃを実施

日時:令和７年１２月７日(日)　１０時～１５時
場所:宮崎医療管理専門学校
今回は、自由遊びや自由工作、焚火＆青空図書館読書を実施しました。

〇思考の実験場「森のアトリエ」

自由工作「森のアトリエ」は、子どもたちの想像力と試行錯誤の力を大切にする場です。決められた作品をつくるのではなく、廃材やドングリ、貝殻などの自然素材、さらにはノコギリや絵の具、木工ボンドといった道具を使い、頭の中で描いたイメージを自由にカタチにしていきます。

この日も、大人の発想を軽く超えていく創造の風景が広がっていました。とくに印象的だったのは、絵の具を使った“色の実験”が連鎖のように広がっていった場面です。作業台が空いているのに、あえて地面を作業台にして絵筆を走らせる子。パレットに色を落としては混ぜ合わせ、微妙な色の移り変わりを確かめ続ける子。その姿はまるで、小さな絵師そのものでした。

その様子に魅せられた別の子がまねをし、さらに別の子が加わり、色が滲むように創作の輪が広がっていきました。気がつくと子どもたちの手は、山の紅葉のように鮮やかな色に染まり、その両手を誇らしげに広げて見せてくれました。「やりきった」という表情と達成感が、その小さな手のひらから伝わってきました。

〇けん玉職人、現る

２年前のおTANOしみマルシェで、TANOななっちゃのけん玉に夢中だった男の子がいました。今回、その彼と久しぶりに再会しました。手には自分の「マイけん玉」。技も所作も、まるで職人のように磨かれており、誇らしげに見せてくれた姿がとても印象的でした。

しばらくすると、会場の片隅で温かい光景が生まれていました。小さな男の子とお父さんがけん玉に挑戦していましたが、なかなか思うようにいきません。そこへ、けん玉職人の彼がそっと近づき、技を披露し、やさしくコツを伝えながら一緒に練習を始めたのです。２年前、スタッフから教わっていた彼が、今は誰かに寄り添い、教える側になっている。その時間の積み重ねと成長の確かさに胸が熱くなりました。自信をもって技を伝える姿からは、相手を思いやる気持ちが自然とにじんでいました。この経験はきっと彼の中で大きな糧となり、教えてもらった小さな男の子の心にも、ゆっくりとあたたかく根づいていくはずです。

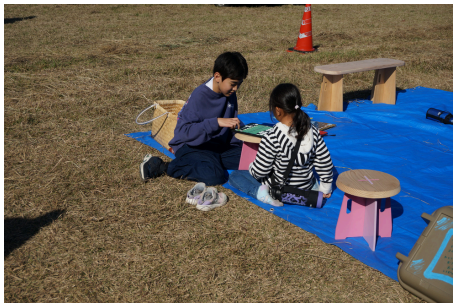
ーーーありがとう、けん玉職人。

〇スタッフではなく、通りすがりの〇〇

活動が進む中、焚き火のそばに、お父さんと高校生くらいの息子さんが立っていました。お願いしたわけではないのに、焚き火の管理をしたり、小さな子どもたちの焼きマシュマロを手伝ってくれたり。まるで「通りすがりのお父さんとお兄ちゃん」が自然に場を支えてくれていました。

TANOななっちゃの場では、このような自然体の関わりがよく生まれます。誰かが誰かを“守ってあげる”という構図ではなく、そこにいる人同士が関わり合いながら、ゆっくりと、しかし確かに、お互いを思いやり、支え合う空気が育っていきます。

現代社会では見えにくくなった「お互いさま」の感覚が、ここでは自然に息づいている。それはTANOななっちゃの強みであり、この活動を続ける大きな意味でもあります。

[今回のまとめ]

遊びは、子どもたちがその瞬間を楽しむだけでなく、自信や発見、思いやりを育む大切な時間です。今回のマルシェでも、その豊かさを多くの方と分かち合うことができました。これからも田野の地域で育まれる子どもたちの学びと成長を、ていねいに見つめ続けていきたいと思います。